



TITLE:

外界および自己についての情報処理に関する一考察: 内的ワーキングモデルの観点から

AUTHOR(S):

古屋, 敬子

CITATION:

古屋, 敬子. 外界および自己についての情報処理に関する一考察: 内的ワーキングモデルの観点から. 京都大学大学院教育学研究科紀要 2003, 49: 494-506

ISSUE DATE:

2003-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/57469>

RIGHT:

外界および自己についての情報処理に関する一考察

—内的ワーキングモデルの観点から—

古 屋 敬 子

A Study on Information Processing of External World and Self From the Viewpoint of the Internal Working Model

FURUYA Keiko

I. 問 題

0. 初めに

同じ状況に出会った時でも、人によってその受け止め方や行動の仕方は様々である。人は自分を取り巻く他者や環境との関わりの中で成長していく過程で、個人に特有の世界理解のための枠組みを培っていくと考えられる。このような個人に特有な事象の解釈の特徴、つまり情報処理の枠組みについて考えるにあたり、Bowlby (1973) の愛着理論の中の“内的ワーキングモデル (internal working model)” の観点から検討したい。

1. 内的ワーキングモデル (internal working model) について

Bowlbyは、人が特定の区別された人物との間に築く情緒的なきずなに「愛着 (Attachment)」という概念を与え、母子の愛着は食欲や本能とは別個の“心理的きずな”であるとした。Bowlby (1973) によると、子どもは愛着対象との具体的な経験を通して、愛着対象が自らの支援や保護の求めに応じてくれる種類の人かどうかといった愛着対象の情緒的応答性についての主観的な確信・表象を形成する一方で、同時に、他者に対する自分の働きかけの有効性に対する主観的な確信・表象を相補的に形成するという。これらは、客観的な関係の反映というより、主観的な経験の力動的体制化であり、相互に補い合いながら発達する。人はこのような自他表象に基づいて、その都度遭遇する出来事を知覚・解釈し、未来を予測して自分の行動を選択していくと考えられる。こうした個人に特有の心的ルールとして仮定されているのが“内的ワーキングモデル (internal working model, 以下IWMと略)” という概念である。

IWMは人生の比較的早期に形成された後は対人情報処理にかかわる無意識的な心的ルールとして働く。人間は新たな事態に遭遇した時、自分の行動を確からしい方向へと近づけるために、個人に内在化されたIWMによって、“世界の意味付け”を行い、不確実な事態や複合的な状況に秩序を与えるのである。IWMの適応的な特徴の1つは、この複合性の統合にあるといえる。ま

た、IWMには個人に伝達される情報をその後の情報処理過程で排除することで、過剰な情報の流入によって個人が混乱するのを防ぐ働きをもつと考えられている。この種の情報の排除は適応的でもあるし、また当然のことでもある。しかし、ある種の情報の流入が長期的に渡って選択的に排除されるような固執的な情報の排除は、個人に深刻な情緒的問題をもたらすと考えられる。Bowlby (1980) はこのような固執的な情報の排除を“防衛的排除”とよび、適応的な情報の排除と区別している。

このような個人に内在化された情報処理の枠組みでもあるIWMの青年期以降における評定法としてMainら (Main and Goldwyn, 1989, 1991) は成人愛着面接 (Adult Attachment Interview; 以下AAIと略) を考案した。これは、“アタッチメント人物”としての自分自身の親についての回想を中心とした半構造化された面接法であり、子どもの頃のアタッチメント関係と、その関係性が及ぼす現在への影響について焦点をあてたものである。このインタビューの評定では、被検者の語った子どもの頃のエピソード記憶や質問に対する言述が、内容的に矛盾なく首尾一貫しているかどうかなど、その内容より語り方に重点が置かれ、自律型 (autonomous) ・愛着軽視型 (dismissing) ・とらわれ型 (preoccupied) の3類型 (場合によっては未解決型 (unresolved) を含めて4類型) に分類される¹。

AAI以外にも、青年期以降におけるIWMの測定を試みる方法がいくつか考案されている。Hazan et al. (1987) は、乳児が新奇場面法でとる行動パターンに対応させて、成人の行動パターンを3種類 (安定/回避/アンビバレント) 記述し、その記述をそのまま尺度としていずれかのタイプに分類させた。日本における研究としては、Hazan et al. のオリジナル尺度を用いた、託摩・戸田 (1988) の研究がある。また、久保 (1995) は、絵の中の親子の状況、気持ちなどを自由に想像してもらうことで、愛着に関わる親子状況についての情報処理の個人差を調べる目的で、親子状況ピクチャー (Picture Attachment Relational Situation, 以下PARS) を考案した。PARSは、自身に焦点化されない第3者の親子状況についての反応を問うものであるため、侵入度も低く、より少ない防衛のもとで、個人に内在化された愛着表象の質が投影されると考えられる。久保 (1995) の研究では、PARSへの反応と自分の親子関係を回想して記述させた結果を比較したところ、自身の親との関係を自己体験として捉えている者ほど、PARSでの反応も気持ちに情緒的な記述がなされやすいことが認められた。また、自身の父母それぞれとの関係が、絵の中の父親場面、母親場面それぞれに反映されることが確認された。このことから、自分の両親との関係が内在化された表象がPARSへの記述に反映されており、その表象によって愛着にまつわる情報が処理されていることが示唆されている。

2. 社会・文化的な枠組みの持つ両義性について

このように個人の内界に流入してくる混沌とした情報を秩序づけるために内的な枠組み (IWM) が仮定される一方で、外的世界にも混沌とした状況を整理し秩序づけるための枠組みがあると考えられる。日常の我々の生活の中には、建物による物理的な枠組みから、ルールや法律など社会から規定された社会的な枠組みまで、さまざまな形での枠組みが存在している。それらの枠組みにたいして、人は時には窮屈さを感じることもあるが、しかし、全ての枠組みが取り払われたとするならば、自らの行動の手がかりを失ってしまい不安に陥るであろう。また、習慣や

因習など、社会を構成するメンバーに暗黙的に共有されてきた枠組みは、個々人を結び付け社会を1つのまとまりとなし、その社会に秩序をもたらすものでもある。しかし、個々のメンバーの側から見た時、必ずしもそれらの枠組みが個人にとって受け入れやすいものであるとは限らず、時に葛藤を感じるものでもある。人は「個」としての存在であると同時に、対人ネットワークの中の社会的存在でもあるために、個人と社会的な枠組みとの間には、時として葛藤が生じる。

一方、心理療法という場においては、適切な制限設定の重要性が指摘される。河合（1981）は治療の場所と時間の制限について触れ、「このような閉じられた空間であるからこそ、クライアントの内界の働きが豊かに表出される」と述べている。クライアントは一定の備えや制限などの枠組みやセラピストの存在に空間的にも心理的にも守られることによって、内界のエネルギーに圧倒されることなく自らの内界に関わっていくことができるのである。このような心理療法における枠組みは、クライアント・セラピストの双方に制約を与えるものであるが、同時に、この「まもり」によって、クライアントの内的成長が可能となるといえる。

心理療法における枠組みのもつ機能と同じように、社会的な枠組みも人の行動に制限を与えると同時に、その制限内での自由と保護を与え、個の成長を守るものである。ルールや習慣などは人の行動に制限を与えると同時に、社会において個人を守り、個人が安心して成長していける場を提供するものでもある。また、個人の属する家庭や学校、社会など集団としての枠組みも、時に人の行動を制限するものとして立ち現れる一方で、人が成長していく上で重要な「まもり」でもある。人が生きていく過程で、今まで守ってくれた枠組みがわずらわしいしがらみのように感じられる時期の1つが青年期と考えられる。このような青年期において、外的な枠組みに対する知覚・解釈の個人差に、内的な枠組みであるIWMはどのように関わっているのだろうか。

3. 青年期の自己感覚について－アイデンティティの観点から

また、人はIWMによって外界からの情報と同時に、自分自身に関する情報も処理していくと考えられる。本研究では、「自分というもの」についての情報処理の個人差を検討するために、アイデンティティ（identity）という概念を取り上げる。

アイデンティティとは、生涯にわたる自我の発達を理解するための鍵概念として、Erikson, E.H.によって理論化された概念である。Eriksonはこれを①自己の斉一性、②時間的な連続性、③帰属性の三つの側面からとらえ、この三つの基準によって定義されうる自己意識の総体としている⁴。彼はその個体発達分化の図式の中で、青年期の心理・社会的課題として「アイデンティティの確立 対 アイデンティティの拡散」をあげている。しかし、アイデンティティの形成は青年期のみに限定される発達課題ではなく、「その大半は生涯にわたって続く無意識的な発達課題であり、その根源は、早期幼児期における自己承認にまでさかのぼる。（Erikson 1959）」とも述べている。人生早期において、子どもは母親（養育者）との関わりを通して、自らの欲求を解消し応答してくれる一貫した存在があるということを体得していく過程で、自分を取り巻く世界・他者への基本的信頼感が生まれると同時に、自分の活動が効果を生み出すという自分の存在そのものへの信頼感が芽生えてくると考えられる。この基本的信頼感は、後の健全な自我発達にとって重要な基盤となってくる。

Eriksonの抽象的で多義的なアイデンティティの概念を、より具体的で操作的な基準で捉えよう

としてMarcia,J,E (1966,1980)は,“同一性地位 (Identity Status)”という概念を提唱した。彼は同一性地位を規定する心理社会的要因として,①危機 (crisis)の有無 (いかなる役割,職業,理想,イデオロギーなどが自分にふさわしいかについて,迷い試行する意思決定の期間)と,②自己投入 (commitment)の有無 (自らの意思決定の後に続いておこる,職業やイデオロギーなど人生の重要な領域に対する積極的関与)の2つの基準をあげ,4つの同一性ステイタス (同一性達成・モラトリアム・早期完了・同一性拡散⁴⁾)を設定した。青年期において,人は「危機」に直面することによって,それまで拠り所としていた親から受けついだ同一性を放棄し,自らの新しい同一性を獲得していく。そのプロセスは時に困難に満ちたものであり,様々な精神的な不調を伴うこともある。しかし,このような困難な過程でもある「危機」の中に,新たな「自分」の萌芽が潜んでいるともいえる。本研究では,アイデンティティの形成にとって重要と考えられる「危機」と「自己投入」について,IWMの観点から検討する。

Ⅱ. 目 的

個人に内在化された情報処理のモデルと考えられるIWMが,外的な存在である社会的枠組みの解釈へどのように影響しているのか,その解釈や対処のあり方の個人差とIWMの関連を検討することを目的とする。また,自分に関する情報処理とIWMの関連性を検討するため,アイデンティティに関する概念をとりあげ,「危機」と「自己投入」という点から「自分というもの」への解釈の個人差を検討することを第2の目的とする。

Ⅲ. 方 法

1. 被検者:男女大学生226名 (男性133名,女性93名)。年齢は18~29歳 (平均:20.15,SD:1.76)であった。

2. 調査内容:

① 親子状況ピクチャー (Picture Attachment Relational Situation,PARS)

「絵の中の親子の状況,気持ち,展開を問うことで,愛着に関わる親子状況についての情報処理の個人差を調べる方法」として久保 (1995)が考案したものである。自身に焦点化されない第3者の親子状況についての反応を問うものであるため,侵入度も低く,より少ない防衛のもとで,個人に内在化された愛着表象の質が投影されると考えられる。

本研究では愛着の質をより詳細に検討するために,久保のオリジナル図版のうち愛着行動のパターンを見るため,部屋を出ようとする母親を子どもが後追いつける「分離 (図版3)」場面,子どもが留守番をしていたところに両親が帰宅する「再会 (図版4)」場面の2場面に加え,ストレス状況での子どもの行動傾向およびそれに対する親の応答性についてみる目的で,母親が台所で料理を作っているために,子どもが放って置かれる場面 (図版1)と,父親に対する信頼感および父親との情緒交流に関する表象の質についてみる目的で,父親が子どもを抱き上げている親子の交流場面 (図版2)を新たに作成した。回答に際しては,それぞれの図版について「この絵

はどういう状況（場面）でしょうか？」（状況解釈を問う質問）、「登場人物の気持ちはどうでしょうか？」（子ども及び大人の気持ちを問う質問）、「この後の展開はどうなるでしょうか？」（展開を問う質問）の各質問に自由に記述してもらった。

② 社会的枠組み場面図版（Social Flame Situation Picture; SFSP）

図版の中の人物の状況や気持ちなどを自由に記述してもらうことにより、他者から課された枠組みに対する態度の個人差を探ろうと考え、P-Fスタディを参考に筆者が考案したオリジナルテストである。日常生活にありがちな親や目上の人とのやり取りの中で、課題・禁止を与えられる場面や逆に自由を許される場面に関する被検者の反応に、個人のもつ社会的な枠組みに対する態度が投影されると仮定した。刺激場面のうち半数の3場面は親子関係場面、残りの3場面は上下関係場面になるように設定し、それぞれ、自由を許される（制限を外される）場面、行動を禁止される場面、課題を課される場面から構成した。

回答に際しては、「左側の人物（親・目上）はどうしてこのように言っているのか？」（状況解釈を問う質問）、「この後の展開はどうなるでしょうか？」（展開を問う質問）という質問について自由に記述してもらった。

③ 同一性地位判定尺度（Identity Status Scale）

Marciaの同一性地位の概念に基づいて、加藤（1983）が同一性地位の判定を客観的判定方法にしたがって行い、多数のデータ収集を可能とする目的で開発したものである。この尺度では、①「現在の自己投入」の水準、②「過去の危機」の水準、③「未来の自己投入への希求」の水準の3変数を測定し、その組合せによって同一性地位の判定を行う。本研究では「現在の自己投入」「過去の危機」「将来の自己投入への希求」のそれぞれの側面から、自分に対して各人が持っている表象を多層的に検討するために用いた。

3. 手続き：上記の課題（PARS・同一性地位判定尺度・SFSP）からなる質問紙を作成し、1998年11月上旬から中旬にかけて、大学構内および講義にて配布、回収した。

課題に関しては、PARS、同一性地位判定尺度、SFSPの順に呈示した。PARS、SFSPの各図版に関しては、その図版のもつ特徴を考慮して呈示順序を決定し、同一性地位判定尺度に関しては質問項目の順序のカウンターバランスを行った。

IV. 結 果

1. 結果の整理

① 親子状況ピクチャー（PARS）における各質問の反応の分類

まず、PARSの各質問への反応について、以下の分類基準に従って分類した。

A) <応答性>（登場人物の気持ちを問う質問への記述について）

登場人物の気持ちを問う質問における大人の気持ちについての記述を、大人の気持ちが子どもに向いていて応答的であるかどうかという視点（応答性）から、大人の気持ちが子どもに向けられている反応を「（応答性）高群」、親の気持ちが子どもに向けられていない反応を「（応答性）低群」に分類した。

B) <その後の展開> (展開部分における記述について)

各図版の展開部分で現れた、親子の交流の記述から、両者の雰囲気が良いものを「良好群」、両者の雰囲気が悪いものを「不良群」、親や子どもに関する記述を回避し、どちらも判定できないものを「回避群」に分類した。

以上の分類評定について、ランダムに選んだ50名分について筆者と2人の教育学部生で評定を行ったところ、一致率が89.3%であった。評定が一致しなかったものについては話し合って再評定するとともに、評定基準の客観性を高め、以後は筆者一人で分類した。(分類結果は表1.に示す。)

表1. 各図版ごとのPARS分類結果

	<応答性>		<その後の展開>		
	高群	低群	良好群	不良群	回避群
図版1	37	189	97	61	68
図版2	209	17	155	37	34
図版3	198	28	74	119	33
図版4	183	43	183	21	22

② 社会的枠組み場面 (SFSP) における各質問の反応の分類

次に、SFSPの各質問への反応について、以下の観点から分類した。

A) 状況解釈について

各図版の状況解釈質問において、他者から課される枠組みを制限を課されたと解釈する反応を「制限解釈」に、守りを与えられたと解釈する反応を「守り解釈」に分類した。また、枠組みを外された場面では、その状況を“枠を外されて突き放された”と解釈する反応を「制限解釈」に、“相手の理解の上 (守りのある中) で自由を与えられた”と解釈する反応を「守り解釈」と分類した。

B) 枠組みへの対応について (展開部分での投影対象についての記述から)

展開部分での投影対象についての記述で、課せられた枠組みに対して能動的に何らかの対処を起こしている反応を「能動的対処」と分類し、枠組みを受け入れ従っている反応を「枠受容」に分類した。また投影対象についての記述がなく判定不能な反応は「その他」とした。

SFSPについても、PARSと同様に、この分類基準にそって教育学部の学生2人にランダムに選んだ50名分を評定してもらった結果、一致率が82.7%であった。この分類基準についてもPARS同様の手続きをとり、以後は筆者一人で分類を行った。

また、6図版をととした枠組みに対する解釈・態度の個人差を検討するために、反応の得点化を行った。各図版ごとの反応を上記の基準に従って評定し、各分類にあてはまる反応があれば1点を与えて得点化し、6図版を通した合計得点を算出した。こうして得られた得点を「制限解釈」得点、「能動的対処」得点、「枠受容」得点と命名し、以後の分析を行った。

③ 同一性地位判定尺度

本研究では被検者の特徴を、「現在の自己投入」「過去の危機」「将来の自己投入への希求」と

いう多層的な視点から検討ために、各因子ごとに得点を算出し、分析を行った。

2. 結果

(1) PARSとSFSPの関連性について

PARSの各図版ごとに<応答性（高群／低群）>、<その後の展開（良好群／不良群／回避群）>の各々を独立変数、SFSPの各得点を従属変数とする1要因分散分析を行った。

○制限解釈得点について

図版1で<応答性>の群の効果が有意であり ($F(1,224)=8.48$ $p<.01$)、低群の方が高群より得点が高かった。図版2では、<応答性>の群の効果が有意であり ($F(1,224)=4.01$ $p<.05$)、低群>高群であった。また、図版2では<その後の展開>の群の効果が有意であり ($F(2,223)=4.07$ $p<.05$)、TukeyのHSD検定による多重比較の結果、不良群>良好群であった ($p<.05$)。図版4で<その後の展開>の群の効果が有意であった ($F(2,223)=3.38$ $p<.05$)。TukeyのHSD検定による多重比較の結果、不良群>良好群であった ($p<.05$)。

○能動的対処得点について

能動的対処得点については、いずれの群の効果もみられなかった。

○枠受動得点について

図版2の<その後の展開>の群の効果が有意であった ($F(2,223)=3.45$ $p<.05$)。TukeyのHSD検定による多重比較の結果、良好群>不良群であった ($p<.05$)。また、図版4の<その後の展開>の群の効果が有意であり ($F(2,223)=3.68$ $p<.05$)、TukeyのHSD検定による多重比較の結果、良好群>回避群であった ($p<.05$)。

表2. 図版1におけるSFSPの各得点のPARS反応群別平均値（標準偏差）

図版1	<応答性>		<その後の展開>		
	高群	低群	良好群	不良群	回避群
制限解釈	4.22 (1.16)**	4.77 (1.03)**	4.57 (1.13)	4.79 (1.03)	4.74 (1.02)
能動的対処	2.73 (1.50)	2.39 (1.18)	2.41 (1.24)	2.39 (1.33)	2.54 (1.18)
枠受動	2.54 (1.30)	2.52 (1.15)	2.62 (1.15)	2.38 (1.33)	2.53 (1.06)

表3. 図版2におけるSFSPの各得点のPARS反応群別平均値（標準偏差）

図版2	<応答性>		<その後の展開>		
	高群	低群	良好群	不良群	回避群
制限解釈	4.64 (1.07)*	5.18 (0.88)*	4.54 (1.14)*	5.00 (0.78)*	4.94 (0.89)
能動的対処	2.43 (1.24)	2.65 (1.32)	2.40 (1.27)	2.51 (1.33)	2.59 (1.05)
枠受動	2.54 (1.17)	2.35 (1.22)	2.64 (1.16)*	2.08 (1.34)*	2.50 (0.93)

表4. 図版3におけるSFSPの各得点のPARS反応群別平均値（標準偏差）

図版3	<応答性>		<その後の展開>		
	高群	低群	良好群	不良群	回避群
制限解釈	4.67 (1.07)	4.75 (1.11)	4.68 (1.05)	4.66 (1.11)	4.73 (0.98)
能動的対処	2.48 (1.20)	2.18 (1.49)	2.47 (1.30)	2.48 (1.22)	2.27 (1.23)
枠受動	2.49 (1.13)	2.75 (1.48)	2.51 (1.11)	2.45 (1.21)	2.82 (1.18)

表5. 図版4におけるSFSPの各得点のPARS反応群別平均値(標準偏差)

図版4	<応答性>		<その後の展開>		
	高群	低群	良好群	不良群	回避群
制限解釈	4.63(1.09)	4.86(0.99)	4.61(1.07)*	5.24(0.77)*	4.73(1.20)
能動的対処	2.45(1.22)	2.42(1.35)	2.46(1.26)	2.19(1.25)	2.55(1.14)
枠受動	2.53(2.51)	2.51(1.32)	2.61(1.15)*	2.43(1.29)	1.91(1.11)*

(2) PARSと同一性地位判定尺度の関連性について

PARSの各図版ごとに<応答性(高群/低群)>、<その後の展開(良好群/不良群/回避群)>の各々を独立変数、同一性地位判定尺度の各因子得点を従属変数とする1要因分散分析を行った。

○「現在の自己投入」について

現在の自己投入については、いずれの群の効果も有意でなかった。

○「過去の危機」について

図版2の<応答性>の群の効果の有意傾向がみられた($F(1,224)=3.14$ $p<.10$)。高群>低群であった。図版4では、<応答性>の群の効果の有意傾向がみられ($F(1,224)=3.19$ $p<.10$)、高群>低群であった。また、図版4では<その後の展開>の群の効果が有意であり($F(2,223)=3.14$ $p<.05$)、TukeyのHSD検定による多重比較の結果、良好群>不良群であった($p<.05$)。

○「将来の自己投入への希求」について

図版1の<その後の展開>の群の効果の有意傾向がみられた($F(2,223)=2.64$ $p<.10$)。TukeyのHSD検定による多重比較の結果、良好群>不良群の傾向がみられた($p<.10$)。また、図版3の<その後の展開>の群の効果の有意傾向がみられた($F(2,223)=2.68$ $p<.10$)。TukeyのHSD検定による多重比較の結果、良好群>回避群の傾向がみられた($p<.10$)。

表6. 図版1における、同一性地位判定尺度の各因子得点のPARS反応群別平均値(標準偏差)

図版1	<応答性>		<その後の展開>		
	高群	低群	良好群	不良群	回避群
現在の自己投入	15.54(3.72)	15.11(4.04)	15.56(4.28)	14.79(3.95)	15.00(3.58)
過去の危機	17.38(3.48)	17.68(3.55)	17.90(3.42)	16.90(4.15)	17.90(3.00)
未来の自己投入への希求	16.57(2.66)	16.74(3.43)	17.19(3.13)+	15.95(3.76)+	16.72(3.06)

表7. 図版2における、同一性地位判定尺度の各因子得点のPARS反応群別平均値(標準偏差)

図版2	<応答性>		<その後の展開>		
	高群	低群	良好群	不良群	回避群
現在の自己投入	15.17(3.91)	15.35(4.97)	15.28(3.73)	15.05(4.85)	14.85(4.19)
過去の危機	17.75(3.38)+	16.18(4.97)+	17.73(3.32)	17.32(3.94)	17.50(4.05)
未来の自己投入への希求	16.71(3.21)	16.71(4.51)	16.85(3.19)	16.43(3.32)	16.38(3.86)

表8. 図版3における、同一性地位判定尺度の各因子得点のPARS反応群別平均値(標準偏差)

図版3	<応答性>		<その後の展開>		
	高群	低群	良好群	不良群	回避群
現在の自己投入	15.29(4.01)	14.43(3.80)	15.77(3.63)	14.99(4.23)	14.55(3.79)
過去の危機	17.72(3.50)	17.00(3.75)	17.88(2.95)	17.59(3.78)	17.21(3.85)
未来の自己投入への希求	16.68(3.31)	16.93(3.41)	17.39(2.88)+	16.50(3.57)	15.97(3.10)+

表9. 図版4における、同一性地位判定尺度の各因子得点のPARS反応群別平均値(標準偏差)

図版4	<応答性>		<その後の展開>		
	高群	低群	良好群	不良群	回避群
現在の自己投入	15.09(4.02)	15.56(3.84)	15.07(3.93)	15.57(4.39)	15.77(4.17)
過去の危機	17.83(3.20) ⁺	16.77(4.63) ⁺	17.76(3.19)*	15.86(5.41)*	18.23(3.72)
未来の自己投入への希求	16.67(3.23)	16.88(3.68)	16.71(3.25)	16.10(4.50)	17.32(2.46)

V. 考 察

(1) PARSとSFSPの関連性についての検討

「制限解釈」得点については、図版1と図版2において、親が子どもへ気持ちを向けておらず子どもへの応答性の低い親という反応を示した群の方が、子どもへ気持ちを向けていて応答的な親像を記述した群より、与えられた枠組みを制限と解釈しやすいことが示唆された。また、図版2において、展開部分での親子間の交流の雰囲気が悪い反応を示した群や、図版4の展開部分で子どものストレスが親との関係を通して解消されず関係性が悪いままの反応を示した群の方が、良い親子の関係性を記述した群より、枠組みを制限と解釈しやすいことが示された。

PARSへの反応には、親子のかかわりに関する個人に内在化された表象が投影されると考えられることから、子どもへの応答性が低く、親との関係によってもストレスが解消されない親という表象を内在化させている者の方が、他者からの枠組みを自らの行動・自由を制限するものと解釈しやすく、一方、応答性のよい親表象を内在化している者の方は、他者から与えられた枠組みを自らのための守りと解釈しやすいことが示唆された。このことから、個人に内在化された親表象が、他者から与えられら枠組みを、自分にとってどのような意味を持つ存在として受け止め、解釈するかというということと関連することが示唆された。

また、<応答性><その後の展開>の両方で群の効果がみられた図版2について詳しく見てみる。<応答性>低群の反応について、父親が子どもを抱き上げている場面で父親の気持ちが子どもへ向いていない反応というのは、外的に表れている行動と内的な心情が矛盾する状況を示していると考えられる。一方、<その後の展開>で交流不良群の反応は、「急に子どもが泣き出す」「父親が子どもを落とす」など、突然それまで交流の雰囲気が崩れるものであり、他者や世界に対する不安定なイメージが投影されていると考えられる。このような他者・世界に対する不信感や不安定なイメージを内在化させているものは、外的な枠組みを自らを制限するものとして解釈しやすいことが示唆された。ここで注意しておかなければならないのは、他者に対する信頼／不信感というものは、二者択一で存在しているものではなく、個人の中にはその両者が存在するということである。その中で、どちらかが他方を上回って存在しているために、個人の傾向として前面に現れているのである。今回、図版2のように父親との良い交流を想起させる場面で不安定な他者・世界像を投影する者は、心地よい雰囲気の場面においてもその潜在的な不信感が強く現れる傾向があることが伺える。そのような特徴と、他者から枠組みをあたえられた場面を「まもり」のある安定した状況として解釈することが困難な傾向に関連性がみられた。

「枠受動」得点について、図版2及び図版4で、その後の展開において親子間の雰囲気の良い交流が投影されている良好群の方が、雰囲気の悪い親子間の交流を投影する群より、他者からの枠組みを受け入れて従う反応が多かった。図版2での良好群の反応には、父親との良好な交流が安定して続いていく親子像が、また図版4は、親との再会場面あるいはストレンジャーとの出会いという場面解釈が多く、子どもにとってストレスフルな状況が親との関係性の中で解消していくという親子像が投影されているものと考えられる。このような、親との安定した関係性の表象を内在化しているものは、その安全感をベースに、他者・世界に対する信頼感を形成し、他者からの枠組みに対しても信頼して従うことができる傾向があると考えられる。

以上の結果より、応答性のある安定した親表象を内在化させていることと、親や目上の人から課せられる枠組みを守りと解釈し、枠組みを受け入れる傾向に関連性があることが示唆された。これは、親子の相互作用を通して形成されたIWMが、具体的な親子関係を離れても対人情報処理の心的ルールとして働いていることを示唆すると考えられる。

(2) PARSと同一性地位判定尺度との関連性についての検討

「過去の危機」得点について、図版2と図版4において、子どもの方へ気持ちを向けていて、応答性の高い親像を投影している群の方が、子どもに気持ちを向けていない親像を投影している群より、過去の危機を経験している傾向が示唆された。また、図版4の展開部分で、良い雰囲気的交流する親子像を投影した者の方が、悪い雰囲気の親子像を投影したものよりも、過去の危機を経験していることが示された。

アイデンティティの形成における心理・社会的「危機」とは、新しい「自分」というものへの意識を核に、それまでの経験を再統合していく問題に直面し、新たな「自分」を世界に位置づけていくプロセスでもある。このように他者とは違う「自分」という感覚を統合するために通過する過程として「危機（クライシス）」は積極的な意味を持つと考えられる。今回の結果から、そのような危機を経験することと、信頼できる他者（世界）像が内在化されていることの関連が示唆された。安定して応答してくれる親像を内在化した者は、世界や他者への信頼感をベースに、「自分とは何か」という内的な作業をしていく方向へと自らのエネルギーを向けることができるために、危機に直面することができるのではないかと考えられる。このことから、安定した他者との関係性を内在化していることが、「自分」というものを探究していく作業にとって重要なものであると考えられる。

「将来の自己投入への希求」得点については、図版1では＜その後の展開＞で、親子間の交流が良好な親子像が投影された群の方が、交流の悪い親子像を投影した群より将来の自己投入への希求が高い傾向が伺えた。また、図版3では親子間の交流が良好である群の方が、その後の展開で親子間の状況への言及がなかった群より、自己投入への希求が高い傾向が示唆された。

この結果から、ストレスが親との関係をとおして解消される親子像を内在化している者の方が、自らが自己投入できる領域を求める傾向が伺え、自己投入できる領域を求める姿勢には、安定した世界（他者）像が関連していると考えられる。幼児期において、子どもが母親という安全基地をベースに探索行動を開始するように、青年期においても安定した世界（他者）像というベースを基に、他者とは違う独自の存在としての「自分」を求める方向へエネルギーを向け、自己投入

できる領域へと探索行動を始めることができるのではないだろうか。このように、安全基地を内在化したものとして、安定した他者（世界）像のもつ意味合いが示唆された。

また、今回の結果からは、「現在の自己投入」についてはPARSに投影される親子像の違いによる有意な差は見られなかった。安定したIWMを内在化していることがアイデンティティの確立の有無に関連するというよりも、危機を自らの人生として経験し、また自己投入できるものを希求しようとする姿勢に、より関連していることが示唆された。

Ⅵ. まとめ及び今後の課題

今回の結果から、応答性のある安定した親表象を内在化させていることと、親や目上の人から課せられる枠組みを守りと解釈し、枠組みを受け入れる傾向に関連性があることが示唆された。このことは具体的な親子関係によって形成されたIWMが、事象の解釈に及ぼす影響の一側面を示唆するものである。また、PARSに表れる内在化された親子関係の表象というものは、現在、実際に自己投入できる領域を得られているかということよりも、かつて危機を経験したことや、将来的に自己投入できる領域を求める姿勢と関連する傾向が見られた。このことからIWMは、アイデンティティが確立しているかということよりも、「自分」というものへの関心の向け方、取り組み方といった姿勢に関連することが推測された。

以上のような結果から、愛着対象（他者）と具体的な経験を通して形成されと考えられるIWMは、様々な事象の解釈の仕方にも影響を与えていることが示唆された。このような無意識的に働いている解釈のルール（枠組み）を用いることによって、人は世界を解釈していくと考えられる。

また、今回の結果からは、課せられた枠組み自体へ働きかける反応傾向と、PARSに表れる投影的親子像には関連がみられなかった。その理由としては、記述された反応自体について再度検討することから、枠組み自体への対処と分類された反応の中にも、異なる質の反応があったことがあげられる。Watzlawick, P. (1974) は、「変化」を「システム内で生じ、システム自体は不変の変化（第1次変化）」と「システム自体の変化（第2次変化）」の2つのタイプに区別し、システム内で何とか問題を解決しようといくら行動を起こしても（第1次変化）同じことを繰り返すだけで、より問題を強化するという結果を招きかねないとし、システム自体の変容の重要性を強調した。枠組みへの対処の仕方としても、その枠（システム）内に留まり問題の解決をはかる行動をとるのか、枠組みの外に出た視点から枠組み自体の変容を目指す行動なのかによって、その質が違ってくものと考えられる。このような対処行動自体の質の違いにIWMが関連しているのかもしれないが、今回の分類の仕方では、両者が同じ分類に評定されてしまうことになり、その違いを検討することができなかった。このようなシステム自体の外に出る視点、つまり自分のおかれたシステムや枠組み自体を相対化する視点の検討については、今後の課題である。

今回の結果から、安定した他者（世界）像というIWMが、安全基地を内在化したものとして個人がアイデンティティを探求する際に果たす意味合いが示唆された。実際の心理療法場面においては、面接の場自体が空間的にも心理的にも守りを提供するものであり、クライアントが自らの探索を開始するための安全基地となることが目指されるともいえる。その様な場において、セ

ラビストが自らの解釈の枠組み自体を相対化し、常に事象の重層性に関わっていることは重要であると考えられる。1つの解釈枠や視点に捕らわれることなく、クライアントの「語り」が持つ重層的な意味合いに関わっているセラピストの態度は、面接という両者にとって意識的にも無意識的にも相互に影響を与え合う場を通じて、クライアントに伝わるものである。そのような場において、クライアントは自らの「語り」の背景に沈んでいた意味や情動への探求を開始できるのではないだろうか。常に自らの枠組みを相対化しつつ1つの視点に縛られない視点の柔軟さ、重層的に物事を捉えていく力は、心理療法のプロセスにとって重要な意義をもつと考える。本研究は、そのような自らの解釈の枠組み（IWM）を検討するための1つの試みである。

注

- i 各タイプの特徴は以下の通りである。
 - ・自律型：アタッチメント人物に対する肯定的な感情だけでなく否定的な感情も認識でき、それらの感情を現実に照らし合わせて統合でき、筋道の通ったまとまりのある語り方をする。
 - ・愛着軽視型：否定的感情を含むアタッチメント経験を否定したり排除する特徴が認められ、過度に理想化された親子像が語られる。
 - ・とらわれ型：過去の否定的なアタッチメント経験にとらわれすぎ、過去をまとまりのある物語として語ることにできにくいという特徴が見られる。
 - ・未解決型：児童虐待のような外傷的出来事が、情緒的に未解決のままにされている。
- ii しかし、その概念の意味内容は多義的、包括的であり、明確な定義は困難といわれている。
- iii 同一性拡散型は、危機の経験の有無によってさらに、危機前拡散型と危機後拡散型の2つの下位タイプに分けられる。
- iv 状況解釈での反応は「制限解釈」か「守り解釈」のいずれかに分類されるために、得点は「制限解釈得点」のみを算出した。

引用文献

- Bowlby, J. 1969 Attachment and Loss, vol. 1: Attachment. London: Hogarth. (黒田 実郎 他訳. 1976 母子関係の理論 I：愛着行動 岩崎学術出版社)
- Bowlby, J. 1973 Attachment and Loss, vol. 2: Separation. London: Hogarth. (黒田 実郎 他訳. 1977 母子関係の理論 II：分離不安 岩崎学術出版社)
- Bowlby, J. 1980 Attachment and Loss, vol. 3: Sadness and Depression. London: Hogarth. (黒田 実郎 他訳. 1981 母子関係の理論：対象喪失 岩崎学術出版社)
- Erikson, E.H. 1950 Infant and society, Norton. (仁科 弥生訳. 1977, 1980 幼児期と社会 I・II みすず書房)
- Erikson, E.H. 1959 Identity and the Life Cycle, Intern. Univ. Press. (小此木啓吾訳編 1973 自我同一性 誠信書房)
- Hazan, C., & Shaver, P. 1987 Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 511-524.
- Holmes, J. 1993 John bowlby & Attachment Theory Routledge, London. (黒田実郎・黒田聖一 (訳) 1996 ボウルビーとアタッチメント理論 岩崎学術出版社)
- 加藤 厚 1983 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究, 31, 292-302.
- 加藤 厚 1986 同一性測定における2アプローチの比較検討 心理学研究, 56, 357-360.
- 河合 隼雄 1981 心理療法における場所、時間、料金について 臨床心理事例研究, 京都大学教育学部心理教育相談室紀要, 8, 1-7.
- 久保 恵 1995 青年のもつ内的作業モデルと対人情報処理 京都大学大学院教育学研究科修士論文 (未

刊行)

- 久保 恵 1998 愛着とワーキングモデル 京都大学教育学部紀要, 第44号, 313-324.
- 久保 恵 2000 愛着対象の投影法的研究—親子状況刺激画を用いて— 心理学研究, 70, 477-484.
- 久保 恵 2000 対人恐怖心性と認知的・投影的親子関係像—内的ワーキングモデルの観点からの検討— 教育心理学研究, 48, 182-191.
- 久保田 まり 1995 アタッチメントの研究 川島書店
- Main, M., & Godlwyn, R. 1989 *Adult attachment rating and classification system*. Unpublished scoring manual, Department of Psychology, University of California, Berkeley. [久保田 1995より]
- Main, M., & Godlwyn, R. 1991 *Adult attachment classification system: Version5*. Unpublished manuscript, Department of Psychology, University of California, Berkeley. [久保田 1995より]
- Marcia, J.E. 1966 Development and Validation of ego identity status. *Journal of Personality & Social Psychology*, 3, 551-558.
- Marcia, J.E. 1980 Identity in adolescence. In J. Adelson (Ed.), *Handbook of Adolescent Psychology*. New York: John Wiley & Sons.
- 中西 信夫・鐘 幹八郎 (編) 1981 心理学10 自我・自己 有斐閣双書
- 託摩 武俊・戸田弘二 1988 愛着理論から見た青年の対人態度—成人版 愛着スタイル尺度の試み— 東京都立大学人文学報, 第196号, 1-16.
- 鐘 幹八郎・山本力・宮下一博 (共編) 1984 アイデンティティ研究の展望 I
- Watzlawick, P. & Weakland, J.H. & Fisch, R. 1974 *CHANGE—Principles of Problem Formation and Problem Resolution* (長谷川啓三訳 1992 変化の原理—問題の形成と解決 法政大学出版局)

付 記

本論文は、京都大学教育学部に提出した1998年度卒業論文の一部に加筆、修正したものである。

(博士後期課程2回生, 心理臨床学講座)